企画展「1867年パリ万博150周年記念　薩摩からパリへのおくりもの」に寄せて

1867年パリ万博における薩摩藩とその出品物について

深　港　恭　子

はじめに

明治維新前年の慶応３（1867）年，日本は初めて万国博覧会という国際舞台への参加を果たした。これは，開国を果たした日本が，自ら海を渡り自国をアピールした初の機会である。

その舞台となったのが，フランス・パリで開催された，第２回パリ万博であった。日本からは幕府，佐賀藩，薩摩藩，江戸の商人が参加したが，幕府の意図に反して薩摩藩が独自の展示場を確保したことにより，国内における幕末の激動がヨーロッパに飛び火し，幕府と薩摩藩はパリを舞台に政治闘争を繰り広げることになった。その後の協議の結果，幕府が「日本大君政府」，薩摩藩が「薩摩太守政府」と名乗り，日の丸の下，日本としてまとまることになるのであるが，展示場は別々という状態が維持された。

第２回パリ万博についての先行研究は多くあり，また，万博における幕府と薩摩藩の政治闘争などについてもすでに多くの研究がある。中でも，近著では寺本敬子著『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』(1) は，これまで幕府と薩摩藩の二者の視点で述べられることがほとんどであったパリ万博研究に，フランス政府の視点が加えられることにより，三者の立場が絡み合いながら形作られていくパリの状況をより立体的に描き出している。

また，この万博では，伝統工芸品や産物を中心とした日本の出品物が注目を集め，西洋にジャポニスム現象を引き起こすほどの影響を与えていく。その意味では，幕府と薩摩藩の闘争よりもむしろ，会場に展示された出品物のほうが多くの衆目を集め，ヨーロッパに与えた影響は大きいと言える。

しかしながら，日本の出品物に焦点を当てた研究はそれほど多いとは言えず，特に，幕府に出品目録を提出することを拒んだ薩摩藩の出品物については，日本に残る史料は慶応２年10月１日（1866年11月７日）付の発送分225箱についての大まかなリストがあるのみで，その紹介に終始してきた感がある。また，このリストを基に，薩摩藩は「薩摩と琉球の産物」を出品したとされるものの，その具体的な中身についてはほとんど分かっていない。しかも，薩摩藩はこれ以前に約250箱を独自にパリに向けて送付していることから，リストで判明する薩摩藩の出品物は，全体の約半分に過ぎない可能性が高く，薩摩藩の出品物が実際に薩摩と琉球の産物であったのかについても，現段階では根拠が不十分であると言わざるを得ないのである。

そこで本稿では，パリ万博において薩摩藩が獲得した展示場と，そこに展示された出品物に着目して考察を進めたい。それに当たり，先の慶応２年10月１日付発送分のリストに加えて，開催国であるフランス側の資料に着目する。パリ万博の帝国委員会による，発行時期の異なる２種の『総合カタログ』No.1・No.2 (2) の内容を検討することによって，製作者であり出品者である薩摩藩と，

それを受け入れたパリ万博側の両面から薩摩藩の出品物についての考察を行い，薩摩藩が世界に向けて紹介した薩摩の姿を明らかにしたい。

なお，本稿では日本での出来事は和暦による年号を，フランスでの出来事は西暦による年号を基本として記載する。

1　幕府と薩摩藩の出品の経緯

フランスにおいて，万博開催に向けた具体的な準備が始まったのは1865年３月のことで，すぐさま諸外国の政府に対して万博への正式な参加要請が行われた。日本に対しては，駐日公使レオン･ロッシュを通じて交渉が始まるが，幕府が参加の意思を表明したのは，慶応元年７月２日（1865年８月22日）の書簡においてであった。

当初，幕府独自で出品物の収集が始まったが，慶応２年４月５日（1866年５月19日）に至って，諸藩や商人にも出品を呼びかけることとなる。ただし，あくまでも，幕府統率の下での「日本」の展示が意図されていた。

幕府に対して参加を表明したのは，江戸の商人清水卯三郎（慶応２年２月10日（1866年３月26日）），薩摩藩（慶応２年７月28日（1866年９月６日）），佐賀藩（慶応２年11月25日（1866年12月31日））であり，この４者が参加することとなったのである。

しかしながら，他方で薩摩藩は，幕府の参加表明とそれほど変わらない1865年10月15日（慶応元年８月26日）には単独での出品を決め，フランス人貴族のモンブランにその全権を委託して10月23日（９月３日）には博覧会委員会に登録，「琉球公国」の名で独自の展示場を確保した。この薩摩藩の動きは，遣英使節団の視察員として薩摩藩英国留学生を率いてイギリスに渡っていた五代友厚とモンブランの間で取り交わされており，駐日公使のロッシュ等からの情報を基に日本国内で準備が進んだ幕府とは，その内容を異にする。推測の域を出ないが，モンブランが全権を委託されたことにより，薩摩藩におけるその後のパリ万博出品に向けた準備は，フランスから発せられる情報と指示を基に進んでいったものと考えられる。

幕府の使節団が薩摩藩の「琉球公国」としての出品を知ったのは，一行がフランス・マルセイユに到着した，1867年４月３日（慶応３年２月29日）のことであった。これが発端となり，国内における幕府と薩摩藩の政治的対立がパリを舞台に表面化することとなった。

幕府の抗議を受け，４月21日（３月17日）に至って，幕府・薩摩藩・博覧会事務局の三者で協議が行われ，最終的に「日本」という枠組みの中で，幕府は「日本大君政府」，薩摩藩は「薩摩太守政府」と名乗り，展示場は別々に行うことになったのである。

2　パリ万博という舞台

第２回パリ万博の概要は，次のとおりである[(3)]。

開催期間：1867年４月１日～11月３日（慶応３年２月27日～10月８日）

場　　所：パリ　シャン・ド・マルス

会場面積：６８．７ha

出品者数：約５２，０００人

入場者数：１，１００～１，５００万人

パリ万博の会場は，シャン・ド・マルスの 68.7ha に及ぶ敷地につくられ，中央の温室庭園を囲んで７つの回廊が同心円状に広がる巨大な楕円形のメイン会場「産業宮」が建設され，それを取り囲むように，各国のパヴィリオンや売店，レストランなどが配置された。

産業宮は，円の中心から放射状に国別展示が行われ，中央の庭園を同心円状に取り囲む回廊ごとに，展示物の分野が決められており，円の中心から外周に向かって歩けば国別展示を，回廊にそって歩けば分野ごとの展示を見られるという機能的な配置となっていた。内側から芸術作品，教養芸術（リベラルアーツ），家具と並び，最も規模の大きな外側の回廊には，日用技術品が配置され，機械類に多くのエリアが割かれた。中でも，エドゥー (L. Edoux) による水圧式エレベーターの機械は会場で特に注目を集め，エレベーターでメイン会場の屋上まで登ると展望所となっており，万博会場全体を俯瞰することができた。また，大砲や銃といった最新の武器類を各国が競って出品している。このように，万博会場は，最先端の技術が集う産業見本市といった様相を呈していた。

日本の出品物は，産業宮においては中国・シャム（タイ）と共有の区画で展示され，屋外には２つのパヴィリオンが設置された。その規模は全体の１％に満たないほどであったにも関わらず，日本の出品物は大きな注目を集め，ジャポニスム現象を引き起こすきっかけとなった。優れた出品物に対しては金，銀，銅の各メダルと，最高賞には大型の金メダル（グランプリ）が与えられたが，日本は全体で 64 個しかないこのグランプリを「養蚕，漆器，手細工物及び紙」で受賞している。褒賞授与式には皇帝ナポレオン３世と皇后，各国の王侯貴族らとともに，将軍徳川慶喜の名代として渡仏した，弟の徳川昭武も参列した。

このように，日本の出品物はヨーロッパの人々に好意的に受け入れられたが，会場で最も注目を浴びていた最先端技術を駆使した製品とは方向性が異なっていたことは否めず，日本人の中にはそこにジレンマを感じ取った人もいたようである。薩摩藩を脱藩後，慶応２（1866）年 10 月に長崎を発し，翌年５月に帰国するまでフランスとイギリスに滞在していた中井弘は，万博会場を訪ねている。中井からの聞書 (4) には「当春仏国展観会ニ，皇国よりハ幕府織物を持出し候処，各国よりハ軍艦之堅便之新工夫雛形，夫を制造之器機，或鉄砲之新工夫等，巧を尽し候要器而已持出候ニ付，皇国大失望之由，」とある。幕府は織物を展示しているが，各国は新たな工夫を施した軍艦の雛形やその製造機械，新開発の銃砲などを出品しており，日本は恥をかいたとある。日本人の目に，万博における日本の展示がどのように映ったのかの一端を示しており興味深い。

３　日本の展示区画

（１）シャン・ド・マルス全図

パリ国立工芸院に所蔵されている「シャン・ド・マルス全図」（図１）は，万博会場全体の配置

（□は筆者挿入）

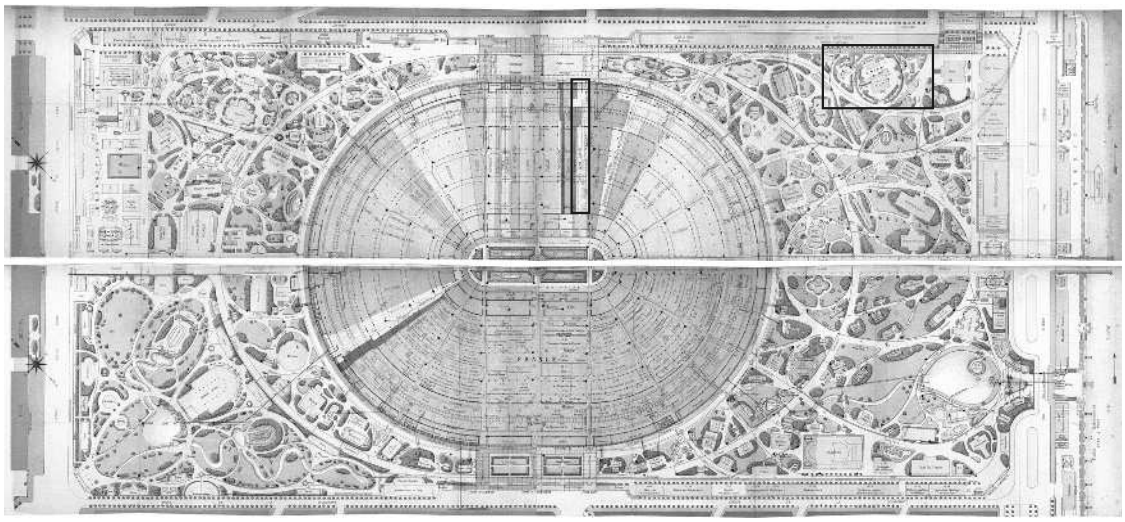


図１　シャン・ド・マルス全図　パリ国立工芸院蔵　デジタルアーカイブ　http://cnum.cnam.fr

図である。これによれば，「JAPON」（日本）と記載のあるエリアは，メイン会場となった産業宮の中に一カ所，屋外に一カ所を確認することができる。

先に述べたとおり，産業宮は建物の中心から放射状に延びる回廊（縦回廊）に沿って国別展示が，同心円状に取り囲む回廊（横回廊）に沿って分野ごとの展示を見られる構造となっていた。このうち，図上部の縦回廊に沿って，「CHINE　SIAM　JAPON」という区画がある。ここが日本の出品物が展示されたエリアである。日本は，中国・シャム（タイ）と共同の区画を与えられており，独立した区画は得られていなかったことが分かる。

また，屋外においては，「CHINE（中国）」と記された中国の円形の展示場を挟んで，左側の区画に「JAPON」とあり，建物を示すと思われる長方形の区画の中に「Maison（家）」，その前の通りには「Allée du Japon（日本通り）」とある。この区画が日本の展示場と理解できる。しかしながら，日本の展示区画はここばかりではなかった。中国を挟んで右側の区画には，「Principaute de Satsouma（薩摩公国）」とあり，その前の通りに「Allée de Liou Kiou（琉球通り）」とある（（参考）図１部分）。

先に触れたが，薩摩藩は幕府とは別に「琉球公国」として博覧会事務局に登録を行い独立した展示場を確保していた。その後，幕府の抗議により 1867 年４月 21 日（慶応３年３月 17 日）に行われた幕府，薩摩藩，パリ万博事務局による三者協議では，日本としてまとまるものの，「日本大君政府」と「薩摩太守政府」として展示場は別々とすることに決した。つまり，図１にある，中国を挟んで右側にある「薩摩公国」とある区画が，当初，「琉球公国」の名で登録した薩摩藩に与えられた展示区画であり，その前の通りに「琉球通り」とあるのはその名残と考えることができよう。

中国を挟んで両側に日本の展示場ができたのは，博覧会事務局が当初，「琉球公国」を日本とは別の国と認識していたことによると考えられる。日本としてまとまったとは言え，元々別の国という認識の下で配置された区画が維持されたまま，「日本大君政府」と「薩摩太守政府」という名で別々の展示が行われたことは，事情を知る由もない一般の来館者の目には，幕府と薩摩藩が台頭に見えても致し方なかったと思われる。

三者協議の結果，決定されたフランス語の「Gouvernement du Taicoun（日本大君政府）」と「Gouvernement du Taichiou de Satsouma（薩摩太守政府）」という名称が，その後の両者の立場に大きな影響を与えていくことはよく知られている。特に，「Gouvernement」という言葉が「自治政府」という意味を含んでいたことにより，幕府と薩摩藩が台頭の立場の，例えばプロシアのような連邦制の国のような誤解を与えるに至ったことは特に知られているが，それに加えて，元は別の国として与えられた二つの展示区画の配置もまた，それを助長することになったと指摘できよう。

続いて，図１にある「Principaute de Satsouma（薩摩公国）」の名称について触れておく。図１がいつ頃の会場の状況を表したものか定かではないが，『総合カタログ』No.1 にある，「Principaute de Liou Kiou（琉球公国）」という表記とも，三者協議後の名称である「Gouvernement du Taichiou de Satsouma（薩摩太守政府）」とも異なる。どの段階を示しているのか現段階では確認できていないが，いずれにしても「琉球公国」として獲得された展示区画であったことは間違いない。

（２）向山一履による会場図

展示場の状況については，幕府使節団として徳川昭武に同行した外国奉行の向山一履（むこうやまかずふみ）（1826－97）が，江戸幕府に対する報告として屋内外の日本の展示場図を書き残しており，三者協議が行われた日の直後に当たる 1867 年４月 25 日（慶応３年３月 21 日）付となっている（図２・３）[5]。

図２には，中央に「花園」と記された庭園のある楕円形の産業宮が描かれ，その一部の縦回廊のエリアに「此通り日本支那之部」，その外周部分に「此所コーヒーを売る所」とある。さらにセーヌ川近くには「囿園之地」とあって，「支那」を中央に右に「薩州」，左に「商人」とある。この状況を図１の「シャン・ド・マルス全図」と比較すると，配置が完全に一致している。向山の絵図は，実際に現地に赴き，パリ万博に関わった日本人によって描かれたものとして貴重な記録であり，図２・３が示す場所に日本の展示場が置かれたと判断して差支えなかろう。

屋外展示場の配置については，さらに詳細な図が描かれている（図３）。「支那ニテ茶屋取建候地」とある円形の中国の展示場を挟んで，右側には「薩州ニテ茶屋取建候地」とある薩摩藩の展示場が，左側には幕府の統轄下で出品した商人の展示場があり，「商人之茶屋取建候地」とある。「茶屋」とあることから，飲食のできる場所が設けられたと考えられ[6]，薩摩藩の茶屋は藩自身が手掛けて建てられ，商人の茶屋は幕府が関わって建てた茶屋と理解できる。

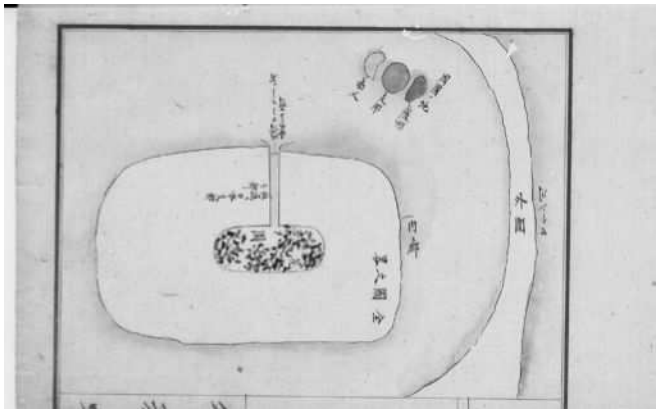
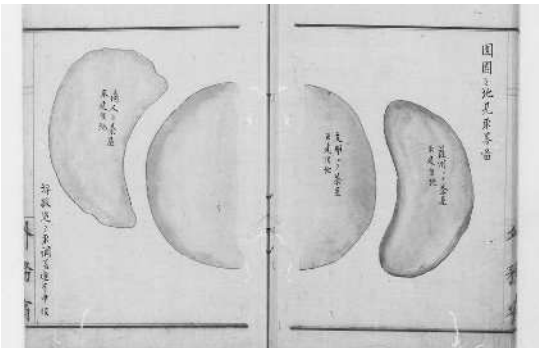


図２　日本の展示場図面
慶応３（1867）年３月21日付
『続通信全覧』「徳川民部大輔欧行一件
五 附仏国博覧会」より
原本：重要文化財　外務省交史料館蔵



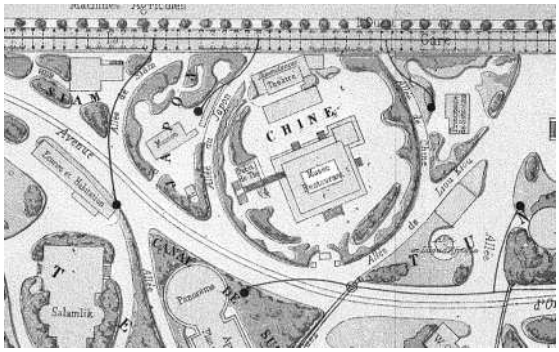


図３　囿園之地見取略図　慶応３（1867）年３月21日付　『続通信全覧』「徳川民部大輔欧行一件五　附仏国博覧会」より，原本：重要文化財　外務省外交史料館蔵

（参考）図１部分

続いて，屋内展示場の「品物差置候場所見取略図」をみてみよう（図４－１～４）。図１には「JAPON」としかない日本の展示場について，図４では幕府・商人・薩摩藩の場所の取り合いが明らかにされている。図４－１から図４－４に向かって，縦回廊（図中には「竪往来」とある。）に沿って展示場が確保されたことが分かる。「横往来」とあるのが，外周に沿って廻らされていた横回廊を指している。また，江戸幕府を示す「政府」は朱色で，薩摩藩を示す「薩州」は灰色で，「商人」は黄色で色分けされており，三者が展示を行った場所が明確に描き分けられている。ここには，同じく参加したはずの佐賀藩の表記がないが，おそらく，幕府に恭順した佐賀藩の展示物は「政府」の中に含まれているのではなかろうか。

まず，展示方法に注目してみよう。図４－１の政府（朱色）の区画には，「此所土間」，「此三方硝子ヲ張タル戸棚高五尺程」，「此ヶ所造作出来」，「此土間へ机ヤウノモノ据付品物餝付候積」とあり，靴を脱がずに観覧できるよう土間となっており，三方を高さ５尺（約 151.5㎝）程のガラス張りの戸棚に囲まれ，前には机のようなものを据え付けて，そこに品物を飾るといった展示方法が取られたことが分かる。通路を挟んで向かい側に置かれた薩摩藩の区画にも，同様にガラス張りの戸棚が設けられており，その他の区画も共通していることから，日本の屋内展示場は概ね同じ仕様によって，ガラス張りの戸棚と机のような台が設置され，そこに品物を置くという方式で展示が行われている。

また，図４の中には，「此土間江戸棚，又ハ机ヨフノモノ据付品モノ飾付候ツモリ，造作出来」，「此所硝子ヲハリタル戸棚高サ五尺程造作出来」，「此所未タ造作ニ不取掛」といった記載が見られ，向山がこの絵図を添えた報告を江戸幕府に送った４月 25 日の段階で，日本の屋内展示場は造作の途中であった。特に薩摩藩のエリアは，そのいくつかに「此所未タ造作ニ不取掛」という記載があって，造作に取りかかっていない段階の展示区画が多くあり，薩摩藩の屋内展示場の造作は，この時点では幕府よりもむしろ遅れているように見える。いずれにせよ，パリ万博の開会式は４月１日に行われているため，必ずしもそれまでにすべての展示が出来上がっていたわけではなかったことが分かる。

特に，薩摩藩の展示区画が造作中であることは注目すべきである。薩摩藩の出品物は，慶応２年 10 月１日（1866 年 11 月７日）前後に 225 箱が発送され，それ以前に約 250 箱が発送されているこ

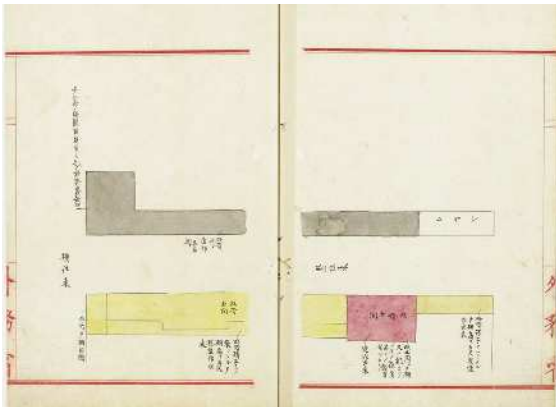


図４－２

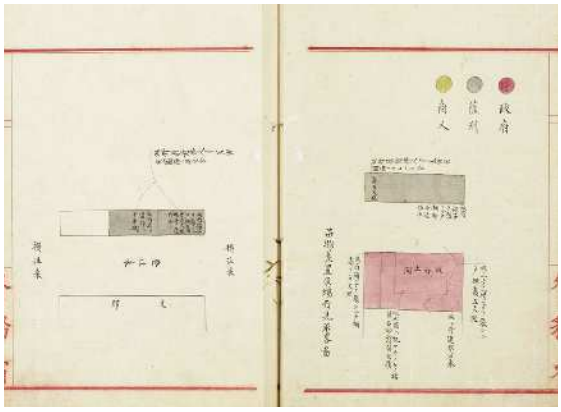


図４－１

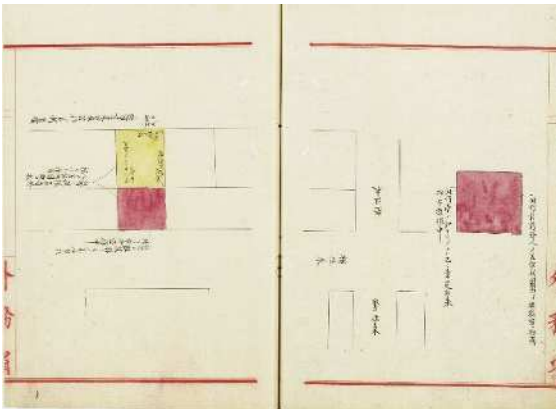


図４－４

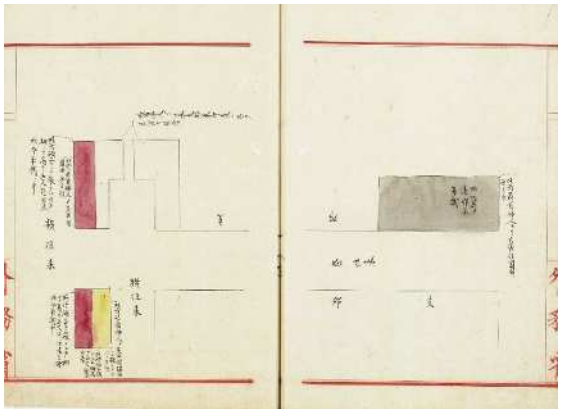


図４－３

図４　品物差置候場所見取略図　慶応３（1867）年３月21日付
『続通信全覧』「徳川民部大輔欧行一件五　附仏国博覧会」より，原本：重要文化財　外務省外交史料館蔵

とから，５カ月後に当たる開会式の頃には，すでにパリに到着していたと考えられる。また，薩摩藩のパリ万博使節団の一人であった野村盛秀によれば，開会式翌日には薩摩藩の荷物が会場に到着し，展示作業に取り掛かったことが確認できるため[(7)]，幕府がパリに到着するよりも前に作業を始めている。それにも関わらず，屋内展示場の展示作業が幕府よりむしろ遅れているようにみえる理由は，現段階では明らかにできていない。一方，屋外展示場は，４月25日頃に完成したようである。野村は，「数寄屋造り」の建物で，外周りに石を敷き詰め，外壁は白色に仕上げたと記している。薩摩藩では，屋外展示場が先に手がつけられ，続いて屋内展示場へと準備が進んだ可能性も考えられよう。

図５は，日本の機械ギャラリーを写した写真である[(8)]。図４－４の右側にある政府（朱色）の正方形の区画を写したものと考えられ，この場所が機械ギャラリーであったことが確認できる。また，図６はフランスで発行されていたパリ万博専門誌「L'Exposition universelle de 1867 iIlustrée」に描かれた同じ区画の挿絵で，手前にシャムの出品物である象の置物があり，ドレス姿の女性に混じって，袴姿の日本人と思われる男性も描かれている。

図５・６は，一見すると，日本をイメージできない中国風の建物である。これは，設計を手がけたのが，スエズ運河会社の設計技師アルフレッド・シャポンという人物であったことによると考

図５　機械ギャラリー：モロッコ・日本
フランス国立公文書館蔵

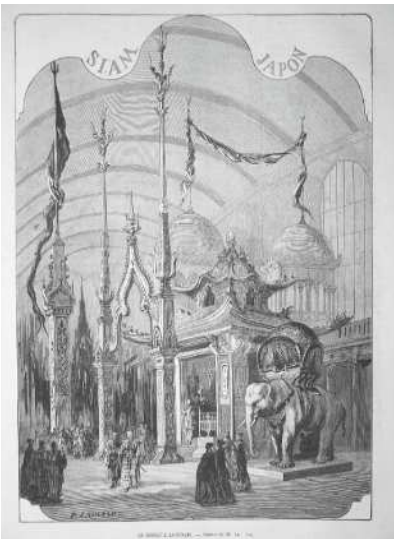


図６　日本の機械ギャラリー
「L'Exposition universelle de 1867 illustrée」

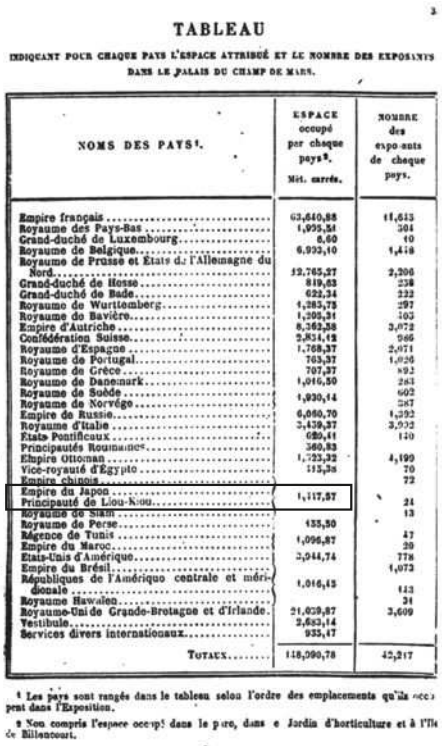
えられ，デザインに中国やシャムとの明確な区別はみられないことから，当時のフランスにおける日本認識が浮き彫りになっている。

続いて，それぞれの区画について見てみよう。薩摩藩の展示区画は，縦回廊を中心として幕府・商人の区画と向き合うように配置されたことが分かる。また，複数の横回廊を挟むように区画が設けられている。先に述べたとおり，横回廊はパリ万博の展示分野ごとに観覧できるように配置されていたことから，縦回廊に沿って長く伸びる薩摩藩の展示区画は，その出品物が一部の分野に偏重せず，多様な分野に対応したものであったことを示唆している。

さらに，幕府（政府）・商人・薩摩藩の区画の面積を比較してみると，灰色に塗られた薩摩藩の区画が広く取られていることが分かる。そこには興味深い記述が見られる。全ての区画に書き込まれた，「此所最前佛人ヨリ差出候図面ニ無之分」という記述である。つまり，薩摩藩の展示区画は，当初，幕府側には知らされていなかったと考えられるのである。

なぜ，このような状況が起こったのか。それには，すでに述べたように，薩摩藩が「琉球公国」という独立国のような体裁で，独自の展示場を獲得していたことが影響を与えたものと考えられる。詳しくは後述するが，パリ万博の開会時に公式に発行された『総合カタログ』No.1には，「Empire du Japon（日本帝国）」と「Principaute de Liou Kiou（琉球公国）」が参加国として併記されている（図７）。また，幕府は薩摩藩の動き

（□は筆者挿入）



TABLEAU

INDIQUANT POUR CHAQUE PAYS L'ESPACE ATTRIBUÉ ET LE NOMBRE DES EXPOSANTS DANS LE PALAIS DU CHAMP DE MARS.

NOMS DES PAYS[1].	ESPACE occupé par chaque pays[2]. Mèt. carrés.	NOMBRE des exposants de chaque pays.
Empire français	63,640,88	11,613
Royaume des Pays-Bas	1,935,21	304
Grand-duché de Luxembourg	6,60	10
Royaume de Belgique	6,933,10	1,418
Royaume de Prusse et États de l'Allemagne du Nord	12,765,27	2,206
Grand-duché de Hesse	819,63	238
Grand-duché de Bade	622,34	222
Royaume de Wurtemberg	1,285,75	297
Royaume de Bavière	1,295,31	103
Empire d'Autriche	8,362,38	3,072
Confédération Suisse	2,831,15	966
Royaume d'Espagne	1,768,37	2,071
Royaume de Portugal	763,37	1,026
Royaume de Grèce	707,37	893
Royaume de Danemark	1,016,50	261
Royaume de Suède	1,930,14	602
Royaume de Norvége		287
Empire de Russie	6,080,70	1,392
Royaume d'Italie	3,439,37	3,902
États Pontificaux	680,41	110
Principautés Roumaines	360,83	
Empire Ottoman	1,723,32	4,199
Vice-royauté d'Égypte	113,38	70
Empire chinois		72
Empire du Japon	1,117,87	21
Principauté de Liou-Kiou		13
Royaume de Siam		
Royaume de Perse	433,50	47
Régence de Tunis	1,096,87	20
Empire du Maroc	3,944,74	778
États-Unis d'Amérique		1,072
Empire du Brésil	1,016,43	113
Républiques de l'Amérique centrale et méridionale		31
Royaume Hawaïen	21,039,87	3,609
Royaume-Uni de Grande-Bretagne et d'Irlande	2,653,14	
Vestibule	935,47	
Services divers internationaux		
TOTAUX	118,990,78	42,217

[1] Les pays sont rangés dans le tableau selon l'ordre des emplacements qu'ils occupent dans l'Exposition.

[2] Non compris l'espace occupé dans le parc, dans le Jardin d'horticulture et à l'Île de Billancourt.

図７　パリ万博参加国一覧
『総合カタログ』No.1